

琵琶湖産アユの資源状況について

1. 魚群探知機による調査

- 1月から調査船の魚群探知機を用いて、①水深30m等深線上の周回コースの魚群数による評価、②横断コースで北湖全域を対象とした推定資源尾数による評価を行っている。
- 魚群数は平年値を下回り、昨年と同程度であった(図1)。推定資源尾数は平年値を下回ったが、昨年を上回った(図2)。

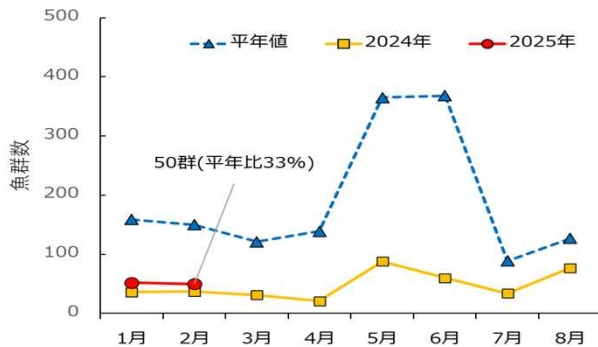


図1 魚群数の推移

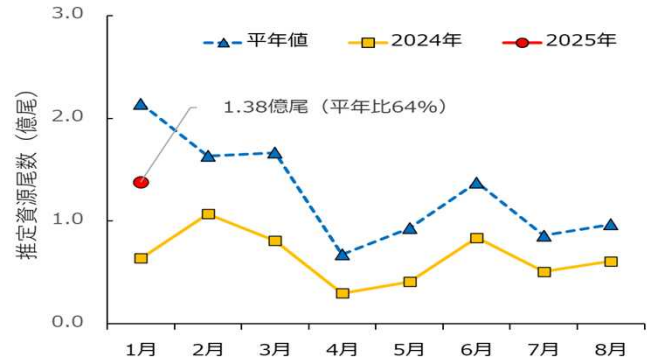


図2 推定資源尾数の推移

2. エリ漁獲アユの体型

- エリ漁獲魚の平均体長を旬別にみると、解禁直後から1月中旬まで横ばいで推移していたが、1月中旬以降に大型化傾向に転じ、40mm前後で推移している(図3)。
- 体長組成をみると、1月上旬までは体長40mm以下の小型個体が大部分を占めていたが、1月中旬以降には体長60mm前後の比較的大型の個体もみられるようになった。

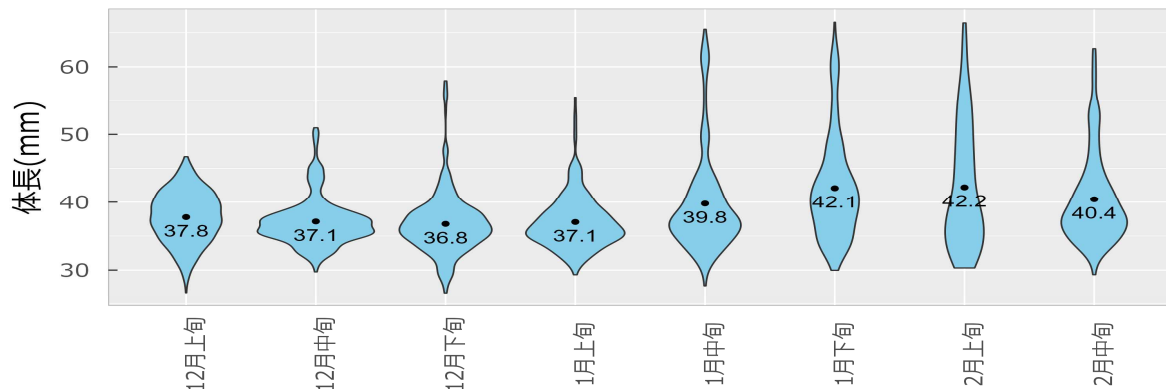


図3 2024年生まれエリ漁獲アユの体長組成の推移

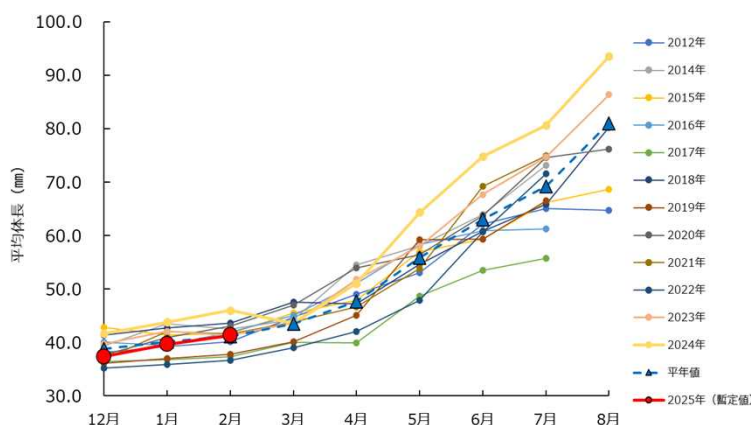


図4 エリ漁獲アユの平均体長推移

- 2月エリ漁獲魚の平均体長は41.3mm（暫定値）で平年値(41.1mm)とほぼ同じ値であり、12月から2月までは平年並に推移している(図4)。

※2月の平均体長は2月中旬までの値から算出しているため暫定値

3. 琵琶湖の環境

●水温

- 深度10mまでの表層では、8月～12月までの間の水温が平年値を上回り、1月以降は平年並みに推移した。
- 2月下旬には、水温が7℃台まで低下した。

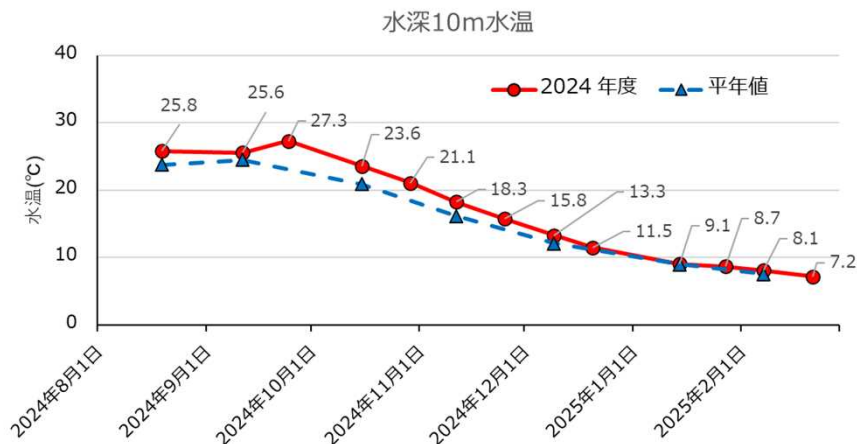


図5 深度別水温推移
(平年値は30年間 (H3-R2年)の平均)

●プランクトン

- ヒウオの初期餌料のノープリウス(ケンミジンコ類の初期幼生)の生息密度は11月まで少なく推移した(図6)。
- 体長15mm以上のヒウオの餌になると考えられるケンミジンコ類の生息密度は、9月中旬までは高かったが1、0月以降平年並みに推移した(図7)。
- 体長20mm以上のヒウオの餌になると考えられる大型ミジンコ類の生息密度は、9月中旬までは高かったが、10月以降平年並みに推移した(図8)。

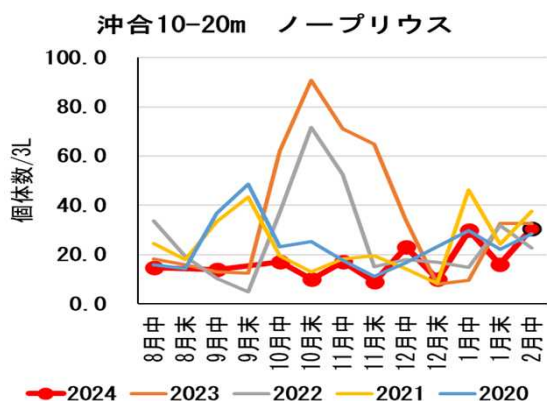


図6 ノープリウス幼生の生息密度

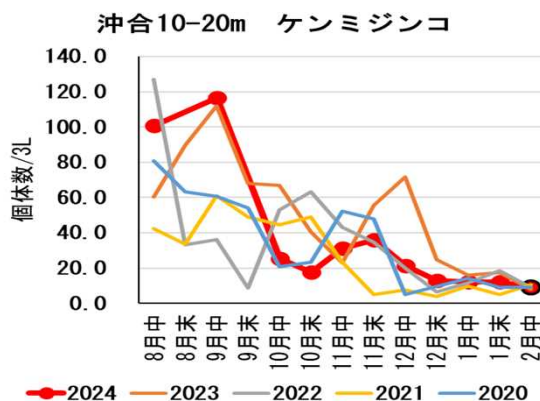


図7 ケンミジンコの生息密度

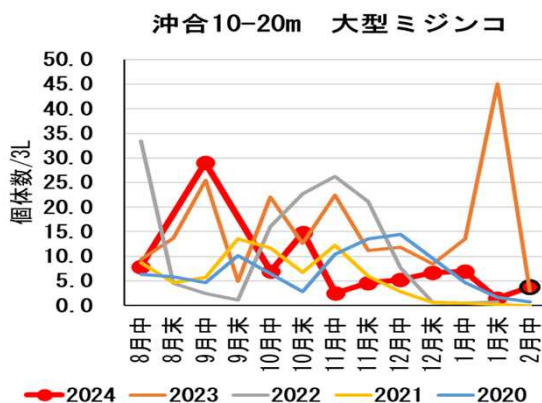


図8 大型ミジンコの生息密度



※2024年2月のプランクトン調査は2月7日に実施しているため参考値

4. まとめ

- 魚群探知機による調査結果から、資源水準は昨シーズン同時期を上回ると見込まれる。このことから、順調に越冬できれば春以降の漁獲は昨シーズンを上回ることが期待できる。